

入試問題の傾向と対策

入試問題の各科目担当者が、自ら出題意図・傾向などを2026年度入試をもとにアドバイスします。じっくり読んで役立ててください。

国語

本学の国語の入試問題は、近代以降の文章を2題出題し、基本的な読解力と論理的思考力を問うことを目的としている。60分間で5000字程度の文章2題を読むため、じっくり噛みくたくより、情報を自分なりに整理しながら読み進める力が求められる。ただし、高校の現代文や大学入学共通テストの対策を通して習得する読み方や、前提となる知識がきちんと身につけていれば、十分合格ラインに到達できる出題内容になっている。また、積極的に文章を読み、簡潔に言い換える練習を日頃から行うことも有益である。

なお、難解な語彙・文学史の暗記は必要ないが、常用外の漢字を出題する場合もある。こちらについても問うているのは難解なことを知っているか、ではなく、知らない言葉に出会った時にまわりの情報を使って考え、推測する力である。国語に限らず、歴史や英語など、さまざまな科目で出会う「知らない言葉」をそのままにせず、どのような意味・読みなのかまず考え、そのあと調べる習慣をつけて欲しい。そういった姿勢が語彙力を上げると同時に、大学入学後に学術的な文章を読むための基礎的な力を養うはずである。

外国語(英語)

[傾向]

本学の英語の筆記試験は、全学部・全学科で同一の60分試験である。

①は語彙力と語法・文法の力を問う穴埋め問題。②は構文・文法・語法の力および語彙力を測る整序問題。③は長文の空所補充問題で、文章の流れを読み取り、空所に入れるべき文を解答として与えられている複数の文から選択する。④は英文の内容について和問和答形式により読解力を測る問題。⑤は英文の内容について英問英答形式により読解力を測る問題である。

[対策]

本学の英語問題の特色は、受験生がどれだけ中学・高校で学んだ基礎知識を身につけているかを測るところにある。出題される問題や長文に用いられている語彙と構文と文法項目のほとんどは中学・高校で習ってきたものである。したがって、学校で用いられた教科書を中心とした教材をしっかりと復習することがとても大切なことになる。

試験では、①と②を正確に早く解答することが、後半の読解問題を落ちついて解くために重要である。③では前後の脈絡を理解し、論理的に考えて筋の通った展開を読み取る力が必要となり、④と⑤では具体的内容の理解に加え主題や概要を把握する力も要求される。

特に④と⑤で求められる読解力は、高校教科書のような、まとまった流れのある文章をきちんとたくさん読むことによって養うことができる。日頃から英語をたくさん読んだり聴いたりして英語を身近なものにするよう心がけるとよい。このように勉強することで、語彙・慣用句と構文・文法の知識を豊かにし、問題を解くのに必要な英語の文構成や論理の展開を理解できる読解力を身につけることができるようになるだろう。

なお、難しい語には【注】がつく場合がある。

日本史

[傾向]

日本史の問題は以下の4点を重視して作成されている。

- ①政治・外交から経済や社会、思想・宗教・文化に至るまで、幅広い歴史知識を総合的に問う。
- ②古代・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国・安土桃山・江戸・明治・大正・昭和・平成に及ぶほぼ全時代を対象に、特定の時代に偏ることなく出題する。
- ③歴史総合の視点から、同時代における海外の状況についても基本的な知識を身につけておいてほしい。
- ④以上の全体的な枠組みのなかで、個々の歴史的事象に関連づけられた、ある程度深い知識を求める。

出題形式では、A・B方式ともに、設問数は50問で、すべてマークシート方式であった。

[対策]

歴史の勉強では、個々の歴史的事象を理解することに加えて、時間の経過に伴う大きな流れも同時に把握することが重要である。まず、一つ一つの歴史的事象について、教科書や用語集、史料集などに記載されている用語・図表・数字・地図などは最低限おさえておくことが必要である。とくに、教科書は図表や地図、注記に至るまでしっかり学習してほしい。そのうえで、個々の事象の歴史的な位置づけを年表などで常に確認する癖をつけることや、とりわけ特定のテーマごとに関連事項をまとめるといった学習方法を取ることが効果的である。

また、解答のヒントがリード文に含まれていることもあるので、すぐに解答に取り掛かるのではなく、リード文をしっかり読むことが大切である。

なお、日ごろから新書などの読書を通じて、歴史への関心と問題意識をもつ姿勢が望ましい。教養は豊富な知識として役立つだけでなく、論理的思考力を高め、より深い歴史の理解を助けてくれるものである。

世界史

[傾向]

「世界史」は、以下の5項目を重視して受験生の理解度を問う出題となっている。

- ①世界史の幅広い基礎知識
- ②世界史の基本的流れ
- ③各時代・地域の特徴と地域間の交流
- ④日本とその周辺地域への影響
- ⑤現代社会で発生した様々な事象との関連

難問は少なく、ほとんどは高校の教科書を丹念に読み込んで理解すれば、合格点の確保が十分可能な問題である。出題範囲は特定の地域や時代に限定されることなく、様々な地域・時代に及んでいる。空欄へ適切な語句等を記述させる問題が若干あるが、ほとんどはマークシートによる選択式問題である。知識だけでなく、資料やグラフ、地図を正しく読み取る論理的な思考力や、歴史的思考力を問う問題もある。

[対策]

受験生は、まず教科書によく目を通し、まんべんなく学習する必要がある。その際、「用語集」や「地図帳」を併用し、重要な事項については、それらの歴史的意義や内容をおさえたい。各事項相互の関係とともに理解しておくことよ。現代世界の動向と関連付けて出題されることもあるので、日頃からニュースにも関心を持つようにしてほしい。

政治・経済

[傾向]

「政治・経済」の出題は、大問が4題で構成されている。その領域は、大別すると①日本国憲法に関連するもの、②政治思想・政治史および現代社会の政治に関するもの、③経済理論や経済活動に関するもの、④国際社会の動向に関するものである。出題のレベルは、一部を除いて高度なものではなく、標準的な基礎知識の確認をするものが多い。その意味で、ほとんどは標準的な教科書に記述されている基礎的な事項の修得を問う問題といってよい。ただし、それぞれの領域における時事的なテーマについては、資料集などに掲載されている重要事項に関しても出題されている。これは、今日の社会において議論されているテーマについて、どれだけ関心をもっているかを問うための出題である。2026年度の試験についてみると、天皇に関する憲法上の規定、日本国憲法前文と9条、民主政治の基本原則、諸外国の選挙制度、市場経済のしくみ、労使関係と労働問題、国際経済の展開、国際連合の組織と役割などを素材とした出題がなされている。問題形式は、空欄に適切な語句を語句群の中から選択するものが半分以上を占めている。ただし、最重要語句については、記述式で解答が求められている。また、文章選択問題もある。

[対策]

いずれの領域に関する問題も、問われているものは、基本的な事項がほとんどであるので、教科書に記述されている基礎的用語を確実に学習しておくことよい。もちろん、「用語集」に掲載されている基礎的用語の出題頻度の高い事項・人名などは要注意である。条約の名称や人名などは、正確に記述することが求められる。わが国の政治や法制度にかかわる人名・地名なども、漢字等で正確に書くことが求められる。誤字やかな書きは減点または零点になる。記述式は、マークシート式よりも配点が高いので、正確に記述することができるかどうかは、評点に大きく影響する。また、図表を活用した問題もあるので、それを読み解く力や四則演算を用いて計算する力も求められる。

時事的問題も出題されるので、それぞれの出題領域に関して、いま何が問題となっているのか、日常的な関心をもって資料集などを十分に活用しておくことよいであろう。

地理

[傾向]

「地理」の問題は、高等学校における日々の学習成果に基づき、大学で人文科学や社会科学を学ぶ上で最低限必要とされる地理の教養が身につけているかを見定めることを目標としている。「人間と自然にかかわる幅広い基本的知識」に加え、「日本を含む世界の諸地域における社会の成り立ちと、その基本的な地理的特質」をテーマにした問題が主体となっている。問題は4大問で構成されており、解答はすべてマークシート方式である。1問目が地形図等の読図と地図・GISについての基礎、2問目は系統地理的内容、3問目は地誌的内容、4問目は主題的内容が中心であった。個々の設問は人文・社会・自然に広くまたがり、また時事問題も含まれているので、日頃から世界全体に偏りなく目を配り、地域の特徴や世界が直面している課題を総合的に理解しているかどうか、地図や統計を読み解く力とともに試される。

[対策]

日頃から高等学校の教科書や地図帳・統計資料などを活用しながら学習し、基本的な地理的知識を身につけておくよう心がけておけば、十分に対応できる問題である。また、世界の諸地域の経済社会動向など、時事問題などもきちんと把握しておく必要がある。地図帳や教科書の中の挿図もただ漫然と眺めるだけでなく、例えばそこは世界の中のどこに当たるかをしっかりと確認しておくことが大切である。また、自然環境・人口・資源・産業などについては、統計資料を活用して基本的な特性を把握しておく必要がある。言語・宗教・産業・文化・環境問題に関しても、分布図・各種主題図やグラフをよみ、どのような地域的特性を示しているのかをとらえておかなければならない。日頃から地理的事象を、地図やグラフに描きながら整理するよう心がけておくことよいであろう。

数 学

[傾向]

出題範囲は、数学Ⅰ、数学A（図形の性質、場合の数と確率）、数学Ⅱ、数学B（数列）、数学C（ベクトル）であり、範囲内からまんべんなく出題される。

「数学」の問題で意図していることは、上記出題範囲の数学が全般的に理解されているか—基本的な数学の力があるか—という点と、問題の意図を理解し数理的に組み立てて解に導いていく力があるかをみることである。

[対策]

上記の範囲の教科書を繰り返し学び、その内容、個々のテーマが意図していること—定義や考え方あるいは解法など—を自分でも誘導したり証明したりできるくらいにおさえておくことである。奇をてらった問題は出されないで、基本的な事柄を自分で他の人に説明できるくらいに十分に把握しておいてほしい。

また、教科書や参考書に見られるパターン化された問題を解くことに加え、問題として記述されている事柄が、数学的にどう表現され、どう解法に結び付けられるのか、その過程を考える力を養ってほしい。

外国語(Reading & Writing)

[傾向]

Reading & Writing は英語の読解力と作文力を測る試験である。Reading の部分は英文を読み、その内容や段落の展開を把握する力を問う。また Writing 部分は、文章の冒頭の空所に適する英文を書いたり、与えられたトピックについて英語で自分の考えをまとめる力を問う。「外国語（英語）」の試験と同様に、難しい語には【注】がつく場合がある。

[対策]

①は長文について文章の流れや前後関係を理解しないと解答しにくい空所補充問題と、内容に関する英問英答形式の問題である。前者の問題は選択肢を間違えると内容把握問題の解答にも影響を与えかねないので、前後関係を論理的に把握する力が必要となる。後者の問題には具体的内容の理解に加え、主題や概要を把握する力が求められる。

②は複数の段落から構成される長文についての問題で、それぞれの段落の最初の文が与えられ、その文に続く残りの文章を選択するという、文章全体の展開や前後関係を把握していないと解けない問題である。

③はそれほど長くない文章が与えられ、その内容を理解した上で、文章の書き出しにふさわしい1文を書く問題である。全体の主旨を表す1文（トピック・センテンス）を入れるのがふさわしい場合もあれば、2文目以降を導く1文がふさわしい場合もあるので、文章全体をよく読んで判断することが重要である。

長文の内容は多岐にわたることが予想されるので、幅広いジャンルに対応できるよう様々な英文に触れて総合的な読解力を養成するよう心がけてほしい。読解力は、高校教科書のような、まとまった流れのある文章をきちんとたくさん読むことによって養うことができる。日頃から英語をたくさん読んだり聴いたりして、英語を身近なものにするよう心がけるとよい。このように勉強することで、語彙・慣用句と構文・文法の知識を豊かにし、問題を解くのに必要な英語の文構成や論理の展開を理解できる読解力を身につけることができるようになる。

④では身近なトピックが英文で与えられ、それに90語以上120語以内のまとまった文章で解答してもらう。一つの決まった正解はないが、トピックに適切に答えているかが重要である。また、語彙を正確に使い、文法的に破綻のない文を書くことが要求される。必ずしも複雑な構文を書く必要はないが、自・他動詞の区別、前置詞の選択、可算・不可算名詞の区別、主語と動詞の一致などの文法事項を単なる知識とせず、運用できるよう心がけてほしい。

外国語(ドイツ語)

[傾向]

外国語(ドイツ語)は、言語運用に関わる能力を幅広く測ることを目的とした出題となっている。レベルとしては、ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)でA1~A2程度を想定している。

まず大問一では、語彙力が問われ、文章中に文脈上ふさわしい単語を補うことが求められる。大問二は文法力を問うており、格変化や人称変化といったドイツ語特有の文法事項に理解があるかが鍵となる。大問三はいわゆる読解問題で、本文ならびに選択肢の意味を適切に把握できるか試されている。大問四は、日常的な話題に関する質問にドイツ語で答えることが求められる。質問の意味を理解できているかはもちろんであるが、自身の考えや思いをドイツ語で表現できるか、発信力を測る設問となっている。

[対策]

大問一~三では、回答の選択肢が与えられており、語彙もA2レベル程度を想定し、日常的に用いられない単語には注を付けている。したがって、基礎的な文法事項や単語の学習を丁寧に反復しておくことが重要である。特に、活用や前置詞の格支配といった事項もおろそかにせず、構文・文法の知識を身につけてほしい。

それに加え、大問四で身近なテーマについてドイツ語で記述できるよう、日ごろから身の回りのことをドイツ語でどのように表せばよいか考える練習をすると良いだろう。そのためにも、ドイツ語のニュースなどを見聞きする回数を増やすなど、ドイツ語に日頃から親しむことが、記述・読解どちらの分野においても大事である。また、手紙(メール文)などの基本的な形式にも慣れておくことが望ましい。

なお、出題する文章については、現代社会で生きていくうえで、高校生諸君にもぜひ知っておいてもらいたい、考えてもらいたいテーマが選ばれることが多い。ドイツ語だけに限らず、広い世界に目を向けながら学習してほしいという希望の表れである。

外国語(フランス語)

[傾向]

本学のフランス語の筆記試験は外国語学部フランス語学科受験対象で、試験時間60分で問Iから問Vまでの5題からなる。

問Iはフランス語長文の日本語訳。問IIは基礎的なフランス語圏の文化・生活に関するフランス語の短文章を読み取りフランス語質問に適切なフランス語文の選択肢を選ぶ形式。問IIIは文法問題に適切なフランス語単語の選択肢を選ぶ形式。問IVは短いフランス語の会話のやり取りで適切な受け答えのフランス語文の適切な選択肢を選ぶ形式。問Vは設問で指示した内容のフランス語作文(40語程度)。

[対策]

本学のフランス語問題のレベルについては、文法は初級文法の全て(条件法現在形・過去形および接続法現在形まで)で、語彙も中級レベル(仏検3級程度)である。難しい語には【注】がつく場合がある。基本的な文法知識の習得はもちろんのこと、1700語程度の語彙(綴り、意味、名詞の性別、動詞の活用、動詞の要求する前置詞)・慣用句や日常フランス語会話の常套表現を習得することが必要である。問Iについては「初級フランス語読本」などで長文読解の学習をするとよい。問Vについては一般的な内容(自分の日常生活・将来の希望・架空のフランス人友人とのメールやり取りなど)で40~50語のフランス語作文ができるように練習しておくといよい。本学のフランス語入試過去問題だけでなく、仏検3級用の参考書・問題集・単語帳の学習がとても有効である。

小論文

小論文では、時事問題をテーマとして、①出題された問題を正しく認識・理解することができるか、②出題された問題を自らに関係ある問題として捉えることができているか、③出題された問題に対して、自らの考えを適切な論拠を示しつつ、説得力をもって論述できるか、④文章表記および文章作成上、正しく記述できているか、といったことを問うている。これを試すことで、大学で学ぶための準備がどれほどできているか、特に時事問題に日常的に関心を持ち、そのことと大学で学ぶことを関連付けて考えているか、自分の思考を正確に表現できるかを評価している。

なお、出題形式としては、外国語学部は、何らかの文章を提示して、それに基づく出題をしている。国際教養学部と経済学部は、参考文章の提示はない。法学部は、新聞の社説などを提示して、その内容の正確な理解を試すとともに、それに基づいて自らの考えを論述する形式をとっている。